



サヤレー法話

—アナータピンディカへの説法—



ディーパンカラ・サヤレー

2012年1月2日



菩提樹文庫



今日が最後の法話になります。明日でリトリートが終わるので、色々な苦しみから解放されます。どうですか、みなさんこのリトリートは楽しかったですか。

私たちは家族みたいなもので、ここに集まって良いことをしていますが、それは過去の良いカルマによって集まっているのです。カルマによって私たち兄弟姉妹がここに集まってきているわけです。

私は 10 年前に日本に来てから、ほとんど毎年来ているのですが、韓国からも招待されて、そこでも歓迎され、去年は瞑想者が 80 人集まりました。韓国からは、また今年も来てほしいと言われているのですが、それは遠慮しようと思っています。韓国の人に、「なぜ日本では毎年 2 回もやっているの？」と質問されましたが、それはカルマのためです。ヨーロッパでも同じで、いろいろな所から招待されるのですが、なぜかドイツを選んで行きます。ドイツは居心地が良いのです。それもカルマによるものだと思います。

私もだんだん年を取って、もうすぐ 50 歳になるので、体も大変になってきて、出てくるのも難しくなってきたので、自分の瞑想に専念したいと思っています。これからは行くところも選んで、日本とドイツと他の所、というように減らして行こうと思っています。

「日本は地震があるのに何でそんな所に行くのですか」とよく聞かれるのですが、「死ぬときはカルマによって死ぬのであって、地震によって死ぬのではない」と答えます。そうではないですか。とにかく、ここで皆さんと過ごせてとても幸せです。

アナータピンディカへの説法

今日はスニャータ・スッタ（空性経）という、空（ゼロ）についてのお経があるのですが、それについてお話したいと思います。みなさん、ゼロという意味がわかりますか？

参加者：「実体がないことだと思います」

何もないということですね。涅槃は物質も精神も原因も結果もないので、何もないということは、涅槃ということです。ブッダの時代に、ブッダにお布施をした、二人の主な施者がいました。一人はアナータピンディカといって大変なお金持ちで、もう一人はウィサカという女性です。多分みなさんも名前を聞いたことがあると思います。アナータピンディカという名前は、「いつも貧しい人に食事を与えていた」という意味です。

彼は商人で、サーヴァッティとラージャガハの間を 500 台の牛車で行き来していました。ラージャガハのビンビサーラ王は、アナータピンディカが来るといつも歓迎してもてなしてくれました。ところがある時、ラージャガハに行くと、王様はとても忙しく

てアナータピンディカをあまりもてなしてくれませんでした。彼は、「なぜ王様はそんなに忙しそうなのですか？」と聞きました。すると王様は、「今ラージャガハにブッダが来ているので、もてなすのに忙しいのです」と答えました。

アナータピンディカはブッダという名前を聞いて、喜びのあまり失神してしまいました。アナータピンディカはもう一度王様に聞きました。「もう一度その名前をお聞かせください」。そこで王様は「ブッダ」と答えると、アナータピンディカはまた失神してしまいました。そしてそれを3回繰り返しました。アナータピンディカは、「ブッダに会わせてくれませんか」と王様に頼みました。しかしその時はすでに夜遅く、夜になると町の門を全て閉めてしまうので、「今はもう遅いから、もしもブッダに会いたいなら、明日お布施をしに行くときに一緒についてきなさい」と王様は言いました。

アナータピンディカはブッダに会いたいという気持ちを抑えきれず、深夜にブッダに会いに行こうとしました。彼の波羅密はとてもよかったので、デーヴァが町の門を開けてくれて、門の外に出ることができました。ブッダの所に行くと、ブッダがそこでダンマトークをしていました。アナータピンディカはそのダンマトークを聞いて預流果（註1）に達しました。

預流果になった後、彼はブッダに対して強い信（サッダー）を確立し、彼の住むサーヴァッティの町にも招待してお布施をしたいとブッダに申し出ました。その後、アナータピンディカはサーヴァッティの王子の所へ行きました。王子はサーヴァッティにとっても美しい森をもっていたので、アナータピンディカはその森を買い取りたいと王子に申し出ました。「なぜ庭を買い取りたいのか」と王子が尋ねると、彼は、「ブッダにお布施したいから」と答えました。そしてアナータピンディカは森に金貨を敷き詰め、そのようにして王子に森の代金を支払い、ブッダにその森をお布施しました。

これがジェータ林のいわゆる祇園精舎です。祇園精舎はこのように、アナータピンディカによってお布施されました。彼は精舎を造った後、ブッダとそのサンガにそれをお布施したのです。彼が祇園精舎をお布施してから24年間、ブッダはそこに滞在しました。ブッダが滞在していると、アナータピンディカは毎日3回精舎を訪ねて、朝食、昼食、夜は飲み物を供養しました。

その時お布施の功德についての法話を聞かせてほしいと、比丘に頼みました。そのため、ヴィパッサナー瞑想についての説明はせずに、お布施の話だけをしました。このようにして、彼は祇園精舎で多くの日々を過ごしました。

彼の最期の日、重い病で動くことができず家のベッドで寝ていました。アナータピンディカはサンガに使用人を送って誰か来てくれるように頼みました。彼は使用人に、まずブッダの所に行ってブッダを礼拝し、「今私は重い病でそちらに行くことができない

ことをお許してください」と伝えて、さらにサーリプッタ尊者にも同じように伝え、サーリプッタ尊者には、「是非こちらにおいで下さい」ということを伝えるように言づけました。サーリプッタ尊者はアナータピンディカの招待を受けて、アーナンダ尊者と一緒に彼の家へ行きました。家に着くとサーリプッタ尊者は、「調子はいかがですか。回復しそうですか」とアナータピンディカに聞きました。アナータピンディカは「尊者よ、私の病はとても重く、回復しそうにありません。私は間もなく死ぬでしょう」と答えました。

サーリプッタ尊者はアナータピンディカに残された時間がとても短いことを知り、彼にとって有益な法話をしようと考えました。サーリプッタ尊者はアナータピンディカが預流果であることを知っていたので、集中や心と身体（ナーマ・ルーパ）について知っていることを認識していました。アナータピンディカには集中などに関して説明する時間がありませんでした。

そこでサーリプッタ尊者は彼にヴィパッサナー瞑想について単刀直入に話しました。その話したことがこの経典に書かれているわけですが、この経典を読んだ人は、「尊者はなぜヴィパッサナーの前に、集中が必要だということを教えなかったのか？」と混乱する方がいます。皆さんは混乱しないでくださいね。預流果になっても、まだ集中する修行は必要です。

そこでサーリプッタ尊者はアナータピンディカの体に集中させ、心を九種類の対象に対して焦点を当てるように教えました。この九つの対象はとても重要で、九つ各々に対してヴィパッサナーをしなくてはならないと話しました。

透明な要素（浄色）

一つ目は、眼の中の透明な要素（pasâdarupa：浄色）です。これはルーパ（物質現象）の一種ですが、これが生じては滅することを観察し、無常・苦・無我を観るようには言いました。観察するのは眼だけでは十分でなく、眼の中の透明な要素が重要です。多くの人は、眼球をヴィパッサナーの対象だと考えますが、眼球の中心の瞳には透明な要素があって、それが小さな微粒子（ルーパ・カラーパ）として存在し、それによって外のいろいろな対象を認識することができるのです。これがなくなると対象を認識することができなくなるので、この透明な要素を観察することが重要になってくるわけです。

どんな風にして眼の中にある透明な要素を観たら良いかというと、四界分別（地水火風の要素を観る瞑想）によって、たとえば太陽光線が当たると塵がキラキラ光って見えるのと同じように、黒目の中にも透明な要素が生じては滅するのを観ることができます。

今回のお話では、ルーパが何種類あるかや、ルーパの性質など、もっと細かい話は時間が足りないので大まかな話にとどめます。細かい説明を聞きたい方は、ゴールデンウ

イークの合宿に来てください。

今は眼の例を述べました。眼において透明な要素が、「生じては滅し」を繰り返しています。しかもその要素の中に三つの性質、つまり「無常・苦・無我」があります。これは眼だけではなく感覚器官である耳、鼻、舌、身体に同じようにあります。

みなさんはルーパ・カラーパの存在を信じますか？

飲み水の中には何が見えますか。毎日飲んでいる水です。その中に何か見えるでしょうか。H₂Oは見えますか、水素や酸素を見ることはできますか？

では、それらがあることを信じることはできますか。

私たちには、類推する(analyze)ことが大事です。見えなくても類推することです。バクテリアはどうでしょう。見ることはできますか。このミネラルウォーターや池、川の水にもたくさんのバクテリアがありますが、普通の、いつもの眼では見ることは難しいのです。顕微鏡を使わなくてはなりません。この場合、顕微鏡は集中力です。同じように、六門つまりさきほどの五つの感覚器官に心をプラスしたものがヴィパッサナーの対象です。

外の対象

二番目の対象は、外側の世界です。人間が見た色、形、などの物質世界です。なぜ、ヴィパッサナーで自分や他人、外の世界を観察しなくてはならないのでしょうか。それは、執着を手放すために必要なのです。

執着というつまり愛、愛着がその原因です。自分を愛していますか。「イエス」ですね。私の眼、私の耳、私の鼻。それらは美しくあってほしい。なぜでしょうか。美しさを愛しているからです。主に、自分の目や鼻に執着があるからです。

そこでヴィパッサナーが必要で、眼にしてもどんだんルーパ・カラーパにまで細かく分解していくと、「眼」というものはなくなって、ただの粉々になった微粒子があるだけです。

他人に対してはどうでしょうか。他人に対しても執着を持っています。たとえば家族、夫、妻、子供たちに対して執着があります。それが事実ではないでしょうか。家族のどれか目、耳、鼻、それらが美しいので、夫や妻を、特に美しく化粧した妻を、ひとりじめにしたいと思います。独身のみなさんはそういうことがよくわからないかな(笑い)。

このように、他人に対する執着というのがあります。「私の夫は、妻は私のものであり、他の者にはやらない」という思いが皆にあります。もし他の人のところに行ってしまったらどうなるでしょう？まず、嫉妬ですね。嫉妬の次は怒りです。怒りの次は？…「殺してやりたい」となるでしょう。どうですか、これがほんとうではないでしょうか。

今言ったことが自然の本性で、世界中どこに行ってもこういうことがあります。他の国に瞑想を教えに行ったときも、誰かが泣きながら人間関係の問題で訴えてきたことがありました。

ブッダはヴィパッサナーをしてから、自分や外のものに対して執着をなくすことが大切である、とおっしゃいました。そして眼、耳などへの、また家や車などの外のものへの執着を、これらの対象を粒子レベルにまで粉々にすることで、無くしていく必要があります。

内側の対象を見たら、次は外側の対象です。この二番目の、外側の対象にも六つあります。色、音、香り、味、身体で感じる触覚、心です。

接触・意識・感受

三番目は外側の対象と、自分の感覚器官が接触することです。これについても六通りあります。六種類の接触です。六種類の接触とは、外側のルーパつまり物質現象と、内側の感覚器官という物質現象が接触することです。眼における接触、耳における接触、心においては思いが浮かぶという接触があります。

内側と外側が触れ合って三番目の接触が起こると、四番目の対象として「意識」が生まれます。眼の色と眼の感覚器官が接触すると、眼識、つまり映像の意識が、耳の場合は音が聞こえるという耳識が生じます。このようにして感覚器官により心に六つの意識が生まれます。

ヴィパッサナーにいくつの対象があったか覚えていますか。すべて六、六、六となります。まずは身体の、眼、耳、鼻などの六つの門についてのルーパ、これが一番目。色、音など外部の対象が二番目。これらが起こす六種類の接触が三番目で、それらから生じる六つの意識が四番目です。

六種類の意識が起こると述べました。五番目として、この意識が生じた後に、六種類の感覚、感受 (Vedana) が生まれます。

地水火風・五蘊・無色界禪

六番目は、六種類の要素です。地、水、火、風の四つはよくご存じと思います。五番目は空間 (Akasa)、六番目は、心基 (Hadayavatthu ハダヤヴァットゥ) つまり心が基礎を置いているところです。

七番目の対象は五蘊です。五蘊とは、五つの集まり、つまり物質現象の集まり、感覚の集まり、「想念、知覚」の集まり、「行」すなわち、ものを形成する働きの集まり、そして「意識」の集まりです。この五蘊も、ヴィパッサナーの対象です。

八番目は、四種の無色界禪です。禪定には大きく分けて、呼吸を対象にする禪などの

色界禪と、無色界禪の二種類がありますが、前者は梵天などの世界で、かすかな肉体と心を持っています。

しかし、第四禪処の梵天には肉体しかなく、意識を持たないものがあります。彼らは過去世で生きていたときに第四禪定を修行していましたが、死ぬときに「我々は欲を持つ心があり、制御できないばかりにこの世に再生してしまう。次の世界ではもうそんなことはいやだ。心があるから欲しくなって、あわただしく暮らすことになる。心はいらない、かすかな身体だけの存在になりたい」と願って第四禪処に生まれ変わると、心がなく身体だけの梵天になります。これは第四禪定を修めた人が行く梵天の世界での話です。

皆さん、これは良いことだと思いますか？

参加者：「心がなくなってしまうと、修行したくなくなってしまうのでは？」

この梵天は石のようになって、とても長い間、ただ存在しているだけです。修行もできず、時間を浪費しているだけです。良い波羅密を積むこともできません。時間だけが過ぎていきます。

ブッダが出てきてからの世（仏住、ブッダサーサナ）には智慧がありますが、彼らにはそのこともわからず、心がないから分析する智慧もなく、ただ身体しかありません。これを「ブッダの教え以外の場所」といい、教えを学ぶことができない、良くない場所だとされます。

ここまでの色界禪は物質が対象ですが、対象が物質ではない無色界禪定、つまり第五禪から八禪の四つのレベルがあります。彼らには身体がなく意識だけがあります。ブッダの修行法にも無色界禪の修行法がありますから、五禪から八禪に達することができます。しかし、（他の教えには）考え方が違うものがあります。

この肉体を持っているといろいろ面倒くさいことがありますね。食べなくては、養わなくてはなど、いろいろな面倒に巻き込まれる。だから「身体はいらない、ただ心だけで生きていたい」という意志をもって願うと、本当に肉体はないが心だけの世界という、無色界禪処に生まれます。その場合は、無色界禪に対する執着が残っています。

無色界禪は非常に繊細で、平和で、静寂です。これを味わうとそこへの執着から脱して（ブッダが現れる）色界に戻るのは難しいのです。他人に会う必要もないし、争いごとを起こす必要もない。非常に静かなところで存在しています。これは一種の非常に洗練された、最上の心です。

ブッダは、これらの無色界禪においても心の成分つまり心（citta）、心所（cetasika）などについてヴィパッサナーをして分析し、執着を断ち切らなくてはならないとおっしゃっています。このようにして無色界禪もあります。

現在と未来の心と身体

九番目の対象は、現在と未来における心と身体です。アナータピンディカは預流果になっていました。原因があって結果があるということは理解していました。そこでサーリプッタ尊者は過去については述べずに、現在についての執着を絶つように、未来の心と体についての執着も絶つようにヴィパッサナーをなささいと言いました。

アナータピンディカは詳しく知っていたのでサーリプッタ尊者は要点だけを述べました。アナータピンディカはすでに悟りの第一段階に入っていたので、この話が理解できたのです。

この九つの対象についてヴィパッサナーを詳細に行うことによって、それ以上することがなくなる、つまり涅槃に入ることができます。することがない、ゼロになるという話です。現在にも未来にも執着がありません。預流果の次の一來果、不還果ではまだ執着が残っていますから生まれ変わる機会があります。最終段階の阿羅漢になるように努力すれば、ヴィパッサナーの対象はゼロになります。

そんな風にヴィパッサナーをすれば、自分の体や心に対する執着も手放すことができるし、他人や外の対象への執着もなくなることができます。同時に、地、水、火、風という四つの要素に対する執着もなくなります。物質現象と心の現象（名色）への執着、五蘊、禪定に対する執着も一切なくなります。現在に対する執着、そして未来に対する執着もなくなります。

未来について言うと、私たちは、未来に対する執着をもって、「何々がしたい」と言って計画を立てているのです。それが事実ではないですか。若いときは「財産を持ちたい」などいろいろな欲、つまり執着がありますが、歳を取ってくると、いずれ死ななくてはならないことを知り、「死んだら財産も持って行くことができないし、私に付いて一緒に死んでくれる人がいるわけでもない」と、だんだん物質に対する執着がなくなってきました。どうですか、それが事実ではないでしょうか。

インドでは、昔の習慣で、夫が亡くなると妻も共に死ななくてはなりませんでした。韓国でも、王が亡くなるとその王の側近は死ななくてはならなかったという伝統がありました。ロミオとジュリエットはどうでしょう？私も若い頃好きで、よく見ました。とてもロマンティックですよね。でも、これは本当は良いことでしょうか、悪いことでしょうか…。あまり良くないですね。特別なケースはありますが、まあ 99%は自分に従って一緒にいてくれる（一緒に死んでくれる）人はいないと思います。

インドでは旦那が亡くなると奥さんも一緒に死ななくてはならなかったとはいえ、その奥さんは本当に、自分は死にたいと思っていたわけではなかったと思います。誰も、

本当は、他人に従って行こうとは思わないのです。ですから年を取ってくると、未来、つまり次の生のことを考えます。どうでしょう、事実ではないですか。みなさんはまだ準備したくないですか。いつ準備するのでしょうか。

次はどこに生まれるのか、とても心配になってきます。動物、餓鬼など、どこの世界に生まれてくるのが心配になるのです。安全であるというのは、預流果以上になっていけば確実です。そうでなければ、人間より下の世界に生まれてしまう可能性があります。

皆さんは今リトリートに集まり、非常に熱心に瞑想しています。まず、預流果になるのが一番好ましいことです。リトリートに来て修行し、法を学び、悟りたいという意志を持っているだけでも、50%の確率で、下の世界に生まれるということはないでしょう。ぜひまた、連休にもいらしてください。

ヴィパッサナーによって執着を手放し、未来にはどこへ行こうとも思わず、ただ阿羅漢になることを目指してほしいと思います。阿羅漢にならない限り、必ず、死ぬと次にどこかに生まれ変わります。あなた自身のカルマがそうさせるのです。カルマによって次にどこへ行くかが決まります。みなさん、それを信じますか。

今までどれだけのカルマを作ってきたのか、良いカルマ、悪いカルマをふくめて、チェックしてみる必要があります。分けてみると、悪いカルマは貪（欲）、瞋（怒り）、痴の三つになります。その反対の良いカルマは、無貪（欲がない）、無瞋（怒りがなく）、慈悲、無痴（智慧がある）、今までの人生を、この六つにおおまかに分けてチェックしてみてください。どれが一番多かったのでしょうか。

いくつ欲を持っていたとか、どれだけ怒っていたとか、去年や一昨年くらい前から、チェックしてみてください。何回くらい怒りましたか。数えられますか。忘れてしまいましたか。なぜ数えられないのでしょうか。多すぎるからです。

どれだけの日数、八戒を守ることができたのでしょうか。三日でしょうか、四日でしょうか。何日間、リトリートに参加したのでしょうか。これは数えられますよね。とても数少ないですから。でも、それではとても危険なことですね。

私たちの次の生は、カルマに従っているのです、悪いカルマが多くて良いカルマが少ないと、危険なところに行ってしまうのです。ですから毎年リトリートで瞑想する必要があります。なぜなら、瞑想では慈悲の瞑想などをしますが、一分間でも大量の非常に良いカルマを作っているからです。リトリートで一週間がんばれば、残りの一年でした悪い行いとバランスをとることができます。とはいえ、リトリート以外での悪いカルマが非常に重いと、バランスをとるのは難しいでしょう。

31の世界

カルマによって次の世界へ行く場合、31の世界があります。31の地があり、無色界禅を修行していた人たちは、望めば一番高いところにある、5、6、7、8禅に相当する世界に生まれることができます。第1禅定から第4禅定の色界禅を修行していた人たちは、それに相当する世界に生まれ変わります。このような世界は、善き人たちが集まる場所です。

また、禅定には入っていないが、お布施をしたり、出家していなければ五戒をしっかり守った人、瞑想に励んだ人たちは天界に生まれ変わります。天界は、さらに6つの世界に分かれ、6つの境地があります。

細かく言いますと、無色界禅の世界が4つあります。第1禅から第4禅までの色界禅は、それぞれの禅につき4つずつ、合計16の世界があります。禅定の世界は、これに無色界禅4つを足して20になります。それから天界が6つ、だんだん下がって行って人間界があり、ここまでで27になります。それから四悪趣とよばれる4つの世界があります。動物界、餓鬼界、阿修羅界、地獄界です。動物界と餓鬼界は、人間界と同じレベルに存在しています。人間とともに暮らしているのです。ですから、人間界はそんなに高い世界ではありません。あまり偉ぶることはないのです。私たちはいつも、動物や餓鬼たちと一緒に世界にいます。死ぬと簡単にそちらの世界に行ってしまう可能性があります。人間界もある意味で危険なところで、注意しなければなりません。

人間界でもダンマについて学び、良いことをたくさんすることが大切です。戒を守らなかったり、良いことをしないでいると、四悪趣といわれる下の世界に落ちてしまう可能性があります。

上から数えて人間界まで27、これに下の世界4つを足して、宇宙には31の場所があります。それらの世界に行くのはカルマによるので、良いカルマを積んでいれば良い世界に行くことができます。急いで、準備してください。怠けずに、良いことをするようにしてください。

話に戻しましょう。サーリプッタ尊者はアナータピンディカに（修行の方法を）いろいろ話しましたが、（病床の）アナータピンディカは話に集中できず、ただ聞いているのがやっとなで、話の内容を実践できませんでした。もし、アナータピンディカがサーリプッタ尊者の話その場で同時に実践できたら、不還果か阿羅漢になれたでしょう。

アナータピンディカは話を聞いて慌てました。いつも精舎に行っても、ダーナ（布施）についてはよく聞いて知っていましたが、ヴィパッサナーについては聞いたことがなか

ったのです。この話を聞いた後も何も起こらず、アナータピンディカは預流果のままでした。みなさんはどうでしょう。今、この話を聞きましたが、アナータピンディカと同じようになりますか？

アナータピンディカは泣いてしまいました。そこで、そばですべてを聞いていたアーナンダ尊者が「なぜあなたはそんなに泣いているのですか。死ぬのが怖いのですか」と聞きました。「それとも、たくさんの財宝や家族を残して行かなくてはならないのがつらいのですか」。

「そうではありません」とアナータピンディカは答えました。「死ぬことも怖くないし、財産や家族などに対する執着もありません。ただ、今まで精舎でもこのような法話を聞いたことがなかったので、そのことで泣いているのです」。サーリプッタ尊者が精舎に戻ってすぐ、アナータピンディカは亡くなりました。そしてすぐに兜率天に生まれ変わりました。

この話は、中部経典の空に関するお経である、マハースンニャータ経（MN 122: *Maha-suññata Sutta*、大空性経）に書いてあります（註ⁱⁱ）。「スンニャータ（空）」とは、今話してきた九つの対象にヴィパッサナーをすることによって執着をなくして行き、それによって名色など、執着の対象がなくなり、空になり、涅槃に行くということを言っています。涅槃に入ると、次に生まれ変わることはなくなります。心（ナーマ：名）もなくなり、身体（ルーパ：色）もなくなり、原因もなければ、結果もない、つまりゼロ、空ということです。このお経は、私たちにとって非常に有益です。今聞いて実践できなくても、いずれ必ず実践できるようになる時が来るでしょう。ありがとうございました。

（一同礼拝）

サヤレー：サヤレーに礼拝していると幸せですか。

一同：「幸せです」

サヤレー：ダンマのことを考え、ダンマを尊敬するようにしてください。サヤレーは女性で、皆さんの中には男性もいらっしゃるの、皆さんの文化ではどうなのかわかりませんが、非常に申し訳なく思っています。

参加者：文化や性別に関係なく、尊敬すべき人に敬意を払っています。問題ありません。

サヤレー：そうですか、でも、（私ではなく）ダンマに敬意をはらってください。そして幸せでいられるようにリトリートにはげみ、よいカルマを積んでください。私は出家して 23 年になりますが、今までブッダ、ダンマ、そしてサンガを尊敬してきました。それによって心はとても幸福です。20 年に渡って皆さんに教えてきました。そしてブ

ッダ、ダンマ、サンガを礼拝し尊重していますが、とくにダンマは、これを尊重することによって幸福になることができます。

私に礼拝しなくても、私は気にしませんから、ダンマを尊重してください。皆さんにはダンマを尊重して幸せになっていただきたいと願っています。

サードゥ！ サードゥ！ サードゥ！

i 預流果：悟りの第一段階、パーリ語でソータパン。第二が一來果。第三が不還果。第四が阿羅漢。

ii 実際は、MN 143 Anathapindikovada Sutta（アナータピンディカ経）にある。

<http://www.accesstoinsight.org/tipitaka/mn/mn.143.than.html>参照。

